

〔宮崎道生先生の思い出〕

宮崎先生の思い出

小杉 彌景

昭和三十七年の春、郷里の小千谷から弘前に出て来た私が、目崎徳衛先生（当時小千谷に御在住）から戴いた名刺を手に、あの懐しい文理学部二階の國史第一研究室に宮崎先生をお尋ねしたのは、津軽の遅い春が晩れようとして、木々の緑が漸く鮮かになり初めた頃の、晴れた一日の昼近くであったように記憶する。

私の差し出す目崎先生の名刺を手に取りられた先生は、一寸懐しそうに表を御覧になり、次いで裏を返してそこに書かれている「理学部の小杉君を紹介します、よろしく」というような短い紹介文を読まれた後、目を私に移して「あゝそう」とおっしゃった。あの独特の「あゝそう」は私にとってこの時が初めてである。

これより先、郷里の小千谷高校で目崎先生から日本史を教わっていた私は、目崎先生を通して宮崎先生の御名前は存じ上げていた。何分、一億総懺悔の時代に小学校、中学校と進んで来た私には、一部の学者・文化人やジャーナリスト達の、時流に迎合するかの如き発言に対して、無知ながらも反撥したい気持があつて、そうした言動がいつとはなしに目崎先生の知るところとなつていたのである。受験を間近かに控えたある日、「弘前に君の尊敬出来るような先生がいる」と言つて貸して下さつたのが、出版されたばかりの『世界史と日本の進運』であつた。私の二

期校選びは、かくて直前にして決つたのであつた。

その敬仰する著者の前に立ち、そのお声を耳にする、この時の感動の程は、四半世紀を経た今にして、なおありありと思ひ浮べることが出来る。

その後私は、色覚異常の故に自然科学を断念することになつたけれども、國史を選んで先生の門を敲くに、聊かの躊躇するところもなかつたこと言うまでもない。

かくて専門課程の二年間、終始先生のお側において戴いた訳であるが、賜つた学恩の数々は言うに及ばず、私生活についても多大のお心遣いを戴いた。

早くに父を亡つた私の境遇を御存知で、郷里に残る母の安否をしばしば尋ねて下さり、又、不出来の私をよく叱つても下さつた。長期休暇で私が帰省する前には、御多忙の中を必らず御自宅（当時桜林町にあつた）にお招きのうえ、奥様のお心尽しの御料理を勧めて下さるのが常であつて、毛内洋雄君や對馬勝年君が同伴であつたこともある。

今、所用で弘前に出掛けて桜林町を歩くことがあると、思い出して胸の締めつけられるような気持ちにかられる。私は私の生徒達にこれ程の心遣いをしたことがあるだろうか、しかも学問の師としての毅然たる姿勢を片時の間も崩すことなしに、と。

宮崎先生にはこれ程の御恩を蒙りながら、今だにその万分の一のお応えも出来ずにいる。只々、不勉強の身を恥じてお詫び申し上げる外はない。

昭和五十三年八月初めの暑い日であつたと思う、前夜お電話を戴いて、

青森駅のホームで先生とお会いしたことがあった。東北線を奥羽線に乗り替えて弘前に向われる、十分足らずの時間であったが、雑踏の中で私の近境をお尋ねになりながら、一枚の短冊を下さった。

一声の警笛を残して去る列車を見送りながら、これからは滅多にお目にかかることもなくなるのだと自分に言い聞かせていた。

短冊のお歌は、先生が前年の秋に九州を旅された際の、南洲墓の銀杏落ち葉を詠まれたものであった。

(青森明の星高等学校教諭)



昭和63年3月、令夫人様と（於国際文化会館）

思い出すままに

千葉 良一

自己紹介から始めたい。

私は昭和二十八年、弘前大学教育学部中学課程社会科専攻生として入学。三十二年三月卒業。爾来、三十一年。青森県の西北五地方の中学校の教師を勤めてきた。

現在は大間越関所のあった、本県の日本海岸南端、秋田県境の岩崎村の中学校に勤務している。

宮崎先生が古稀を迎えられたと伺い、心からお祝い申し上げるとともに、益々のご健勝を願うものである。

最近、続々と出版されている著書を拝見し指導を受けていた頃が懐かしく思い出される。

私と先生との『出会』った頃は、新井白石研究に新境地を開かれ、まさに昇竜の時期であったのではあるまいか。

『出会』のこの二文字も、当時聴講していた新井白石の講義の中で、しばしば述べられたもので、印象に残っている。

当時の先生は、厳しく学生を指導することで知られ、私たち学生は、畏敬の念をもって接していた。あたかも、新井白石その人に接している感があった。

先生は研究者としての厳しさとともに、教育者としての秀れた資質を合せもたれている方である。

先生の受容的な、温容あふれる姿に接するようになったのは、弘前大学国史研究会が発足した頃であった。

国史研究会の機関紙『弘前大学国史研究』が創刊されたのは、昭和三十一年十一月である。その年の十月、教育学部の四年生、十五日にわたって関西方面修学旅行という記事が創刊号に載っている。

京都・奈良を中心としたこの修学旅行も、先生のご指導と援助がなければ実現しなかったものであった。

先生の友人である八坂神社の宮司さんを紹介され、神社に宿泊して、京都の名所旧跡を訪ね歩いたこの旅行は、学生時代の思い出として、今でも時々思い出すものの一つである。

私たちが旅行から帰った頃から卒業まで、研究室が印刷工場に早替りすることがしばしばであった。機関紙の印刷・製本が行われるためであった。

狭い研究室を学生の勉強のため開放され、先生方が奥に引込み、しきってもらった場所が、製本の仕事場に変身し、のりを持ちながらガヤガヤワイワイと仕事をしている私たちの声に誘われて、奥の方から顔を出され、励まされた時の先生の物静かな話しぶりや、もらされた笑顔が今でも忘れられない。

現在でも、機関紙を手にするたびに、創刊期の研究室や先生方のことが浮んで来る。

創刊号以降、何号かにわたって、史料紹介やら、書評などの仕事をいただいたことがある。そのたび、先生のもとに相談に伺うと、若輩の低水準な質疑にも懇切ていねいに指導して下さったことが、今でも印象に残っている。

山鹿素行に関心をもっていることを話した時、新井白石との関連について所見を述べられ、研究をすすめられた。卒業後、岩波版の山鹿素行全集の購入についてお世話いただいたことがあった。今でも、本箱の全集の背文字を見るたびに、力不足のため、今もってまとまった仕事ができないでいる自分を反省するばかりである。

私は冒頭に述べた通り、中学校の教師である。最近ようやく、教師・教育について客観的に眺められるようになった気がする。

生徒や学生に教えることは容易である。しかし、教育は教え、育てることによって完成する仕事である。生徒や学生の可能性をどこまで引き出すことができるか。その教師の力量はそこで評価されるのである。

「やってみせて、言ってみせて、させてみて、ほめてやらねば人は動かず」という言葉がある。山本五十六提督の言葉である。

「やってみせる」というのは上司が一生懸命勉強する。すると部下もやるということ。子どもに「勉強せよ」というよりも、親が机に向かっているか、いつかそれをまねして勉強するのだという解説を雑誌で読んだことがある。まさしくそれは、先生が私たちに示されたものである。

三十一年の間、私は先生から学んだことをなぞってきて、ようやく悟ったような気がしているこの頃である。遅きに失した感もある。しかし、まことによき師に出会ったのだと幸せを感じているものである。

先生の末永いご多幸を祈って止まないものである。最後に先生が弘前を去られる時に頂いた色紙の短歌を紹介して筆をおく。

類いなき花の面影胸深く

刻みつけむと昼夜訪なふ 桜林子

(岩崎中学校教頭)

自由民権と私

橋本正信

私は、昭和三十二年に弘前大学に入学して、すぐ宮崎道生先生の研究室に入った。私は教育学部所属ではあったが、歴史の先生がいらっしやらない関係上、専門に入ると文理学部の国史研究室所属になることを、寮にいた三村先輩から聞いたことによる。

当時の文理学部は、旧制弘前高等学校の建物をそのまま使っており、古色蒼然としたたずまいであった。その時の国史研究室は、二人部屋であり、衝立の奥に机が向い合って二人分あり、左側に宮崎助教授、右側に虎尾俊哉助教授が座わっておられた。衝立の手前右側に渋川先輩の机があり、真中の大きなテーブルに、文理、教育の学生が座われる椅子があった。右側にドアがあり、隣りは西洋史の研究室で、明比教授と相沢助教授、廊下隣なりに東洋史の川久保教授、秋月講師の部屋があり、これが歴史の研究室であった。

三村先輩に連れられて、宮崎先生の研究室を訪れた時、先生は「一年から来るなんて、珍しいね」と微笑んでいらした。その頃の宮崎先生は、東大へ学位論文を御提出なさるために、お忙しい時期であったと推察された。向いの虎尾先生も同様にお見うけした。お二人の会話を衝立越しにお聞きしたことがある。

虎尾「どうも文理や教育の学生より、医学部の学生の方が出来る。日

本史のテストでも医学部の方がいい」。

宮崎「でも最後までやるとは限らないな。文理や教育の学生を大事にした方がいい」。

医学部コンプレックスを持っていた私にとって、何かしら方向を見出した心地であった。

「弘前大学國史研究」がガリ版刷りで発刊されたのもこの頃で、私たちの仕事は、原稿の割り付け、運搬であった。弘前実業高となる前の女子高勤務の小館衷三先生のもとに、ガリ切り依頼の原稿を届けるのが役目であった。

先生はまた、弘前市史の編纂もやっていたらして、大江、川浪など私たち学生を、弘前公園内にあった図書館分館（収蔵庫）に連れて行き、津軽藩日記（御国日記）を読む訓練をさせて下さった。市史編纂メンバーの小館衷三、故蝦名庸一、荒井清明の各先生方がいらして、何かと教えて下さった。帰りは、親方町にあるカワムラのソバを食べさせていたことが忘れられない。

四年生になって、卒論を書くことになり、青森県の自由民権運動を選びたいと先生に申し出たところ、即座に「時代の落し子、流行だね」と言われた。さらに「明治はまだ歴史的评价が決まっていないのだから、せめて江戸時代までにしなさい」ともいわれた。当時の先生の開講講座は、新井白名を中心とした近世史が中心で、丁度、私たちの時に「明治思想史」を開講されたばかりであった。御忠告は、歴史学徒として易きに流れるなということだと受けとめていた。また当時、安保闘争で全国の大学が揺れていた頃であり、そういった風潮に批判的であられた先

生の、実証主義を貫く学者としての信念であられたと思う。先生は黒板勝美博士の「国史之研究」をもう一度読むこと、概説書として優れているこの本の叙述も、江戸時代までであることなど御教示下さった。

しかし、幾日か経っても、私の意志が堅いことを知った先生は、色々な方を紹介して下さいました。東奥義塾の佐藤和夫先生や、弘前市内で古物商を営む八木橋武実氏である。佐藤先生からは、東奥義塾図書館の蔵書閲覧の便や、キリスト教伝播の経緯の御指導をいただいたし、八木橋氏からは、明治十二年の青森新聞（東奥日報の前身）の閲覧を心よく許していただいたし、未発表の史料なので小躍りして喜んだ覚えがある。

また先生は、当時八戸に生れたばかりの社会経済史グループの存在を高く評価しておられ、私にも会うことを勧められた。グループの一人工藤欣一氏を訪ね、文献閲覧の便に浴し得たのも先生のおかげである。史料収集で上杉修氏宅を訪問したが、「そんなテーマをやっていたら就職出来ないぞ」といわれたのが、印象的であった。教育学部の社会科に所属していた私には、指導教官として石崎宜雄教授が、何かとアドバイスをして下さった。「青森県の農地改革史」や「市町村合併誌」執筆当時のメモを貸して下さい、バックアップして下さい。

無事卒論も提出し、卒業後の新任地、階上村立金山沢中学校に赴任したのは、昭和三十六年四月のことであった。翌年三月、北方春秋社発行、八戸社会経済史研究会編纂の「概説八戸の歴史」下巻Ⅰ（工藤欣一氏執筆）が発刊されると、宮崎先生からお手紙が寄せられ、書評を本誌に書くように命ぜられ、雑事に追われていた私には、大きな刺戟となった（本誌第二十九号）。追いかけるように、卒論を簡略にまとめて本誌に

載せよというお手紙をいただいた。喜んで書き上げた（本誌第三十三号、昭和三十八年、「青森県の自由民権運動」―弘前地方を中心に―）。

私はその後、八戸市立湊中学校、弘前大学教育学部附属野辺地中学校と勤務地が変わった。野辺地町在住の折、先生は史料探訪の為此の町を訪れ、私を助手代りに使って下さった。同僚に鼻が高かった。閉校と共に弘前附属に移ってから、本格的に先生のもとに足を運び、史料収集の役を御依頼した。東京大学明治文庫の閲覧を希望していたからである。黒板勝美博士の御息が東大図書館に勤務しておられ、紹介状を先生が書いて下さったのである。上京し、お会いすると、心よく便宜を図って下さり、明治文庫の西田長寿氏と連絡をとられ、自由に閲覧出来る特権を与えて下さった。これも、先生のおかげである。青森新聞を始め、東北地方の新聞・雑誌、民権派新聞だけでなく東京日日新聞など、丹念に調べることが出来、充実していた。

数回上京し、その度に、明治文庫の他、青森新聞の記者小川渉の御息小川喚三氏を訪ねたり、色川大吉東京経済大学教授の開放講座を聴講したりした。色川先生は虎尾先生と東大同期でもあり、「明治精神史」に傾倒していた私を特に面倒見て下さり、東北大学出張講義の際は、仙台でのパーティーに同席までさせて下さった。先生の旧制二高時代の恩師伊東信雄教授が歓迎のスピーチを述べられ、当時ベストセラーになっていた中央公論社の「日本の歴史『近代国家の出発』」の冒頭の書き出しの斬新さ、榎本武揚のシベリア横断をとり上げた見事さを誉められた。東北大学には、岩手県立福岡高校時代の同級生玉懸博之君がおり、石田一良教授のもとで助手をしておった関係もあり、私は日本思想史学会

や、豊田武教授の東北史学会にも入会していた。民権思想史に関して、思想史学会で発表したのも、この頃である。発表のかたわら大学や仙台の図書館を歴訪したり、盛岡の中央公民館で真田太古の新史料を発見したり、岩手大学に森嘉兵衛先生を訪ねたりした。

昭和四十三年に「国会開設運動期の青森県の動向―明治十二年代を中心に―」（本誌第五十二号）を発表、翌年には「青森新聞に関する若干の資料」（弘前大学教育学部附属中学校教育紀要第三号）を、本会研究大会で発表、宮崎先生から色々と御指導をいただいた。また東奥日報に依頼されて掲載したのが「国会開設論争」で、盛岡の日進新聞と、青森新聞との促進論、尚早論の論戦を紹介したものであった。さらに同テーマで文部省奨励研究Bを獲得、東奥日報がそれを取り上げ、顔写真入りで報道したり、史学雑誌の「回顧と展望」欄で認めて貰ったりした。

その後、養父の看病、死去、それに伴う三戸の家の問題等で、高校教師への転出を決意、教育実習の学生と一緒に採用試験へ挑戦、運良く県立三戸高校に決まったのが昭和四十八年四月であった。宮崎先生岡山大学転任の翌年のことであった。その後の十年間は、民権離れの考古学一辺倒となった。教育学部の村越潔教授の直系ということで、発掘に振り回されてフィールドワークを満喫した。ただ、本誌の真似をして、「三戸高校郷土研究」を八号まで出した自負はある。

民権戻りは、新設校に赴任してからである。昭和五十七年九月、青森県の高校の社会科研究大会に、色川大吉先生を講師でお迎えし、虎尾先生、小館先生と四人で懇談した後、翌年に県立八戸南高校の開設準備委員を拜命、翌五十九年から二年間、県立郷土館の「歴史の道」の調査の折、教え子の福井敏隆君から、民権研究の便宜を図って貰い、六十二年

一月の県立郷土館主催の「ふるさと歴史講座」で南部地方の自由民権運動を講演する破目に陥ったことによる。また六十一年一月の岩手県立博物館の大島晃一氏との出会いから八月の上京で、小田為綱や、真田太古の研究家や国立公文書館に寄って史料収集出来た結果でもある。

小田為綱については、高校の社会科研究八戸大会の巡検調べの際、八戸地域史研究会の三浦忠司君と共に久慈の現地調査をした時から興味を持っていたが、森嘉兵衛先生の研究の後、小井田幸哉先生の研究があり、小井田先生とは田子町誌の編纂で原始時代を頼まれていた関係もあり、何かと示唆を受けた。為綱の曾孫小田清綱氏を上京の折、尋ね得たのも収穫であった。東京大学社会科学研究所助教坂井雄吉氏の御教示を受け、一の関の修江短期大学教授大島英介氏にも御指導をいただいた。

真田太古については、田子町在任の馬場清先生の研究が優れているが、上京した折、慶応義塾大学名誉教授手塚豊氏を訪ね、国立公文書館所蔵の史料の裏話を、色々とお聞き出来た。さらに、まだお会いしていないが、鶴巻孝雄氏の真田太古事件を初期自由民権運動と位置づける論考にも接し得た。

考えてみると、私と自由民権は、今年で二十八年間のお付き合いになる。青森県全体の動きを視野に入れるまで、何と怠慢な日々を送ったことになることだろう。今、所属している八戸歴史研究会の機関誌に論考を載せて、そう思った（『八戸地域史』第九号、「南部地方の自由民権運動研究の動向」）。

偉大な師、宮崎道生先生の存在がさらに大きく見えて来た今日この頃である。

（青森県立八戸南高等学校教諭）